



かんじる比良の会

芸術と暮らし、自然が溶け合う比良を発信 地域のつながり強める散策型イベント

大津市比良地域は京都までJR湖西線で30分余り、2005年には湖西道路の通行料無料化により利便性が向上し、都市部にはない静かな生活を求める人たちの関心を集めている。ここに工房を開いた芸術家や工芸作家、ショップ、飲食店などが参加する、地域散策型イベント「かんじる比良」が07年のスタート以来、恒例のイベントとして定着。比良の魅力を発信し始めている。

芸術家や工芸作家ら惹きつける 湖と緑と歴史とアートの地

琵琶湖と比良山系に挟まれた比良地域には、水と緑の自然に恵まれた環境を求めて、1960年代ごろから企業の保養所が数多く建設された。しかし、バブル経済の崩壊、景気低迷とともにそれらは次々と閉鎖に代わって、顕著になったのが、陶芸や木工、漆などさまざまな分野の芸術家や工芸作家の移住や工房、アトリエの開設だった。

先祖代々の地に暮らし、田園風景を守ってきた古くからの住民、クリエイターなどの新住民、別荘の利用者など、

思い思いの暮らし方を楽しむ人々が行き交い、風光明媚な比良には今、独特の地域文化が育まれている。

「かんじる比良」は、2007年に始まり毎年開かれていた地域散策型のイベント。比良地域の魅力を、自然・歴史・文化・アート・食を通じて発信しようと、JR湖西線蓬萊駅から北小松駅間の南北約10km、東西約2kmのエリア内にある工房や雑貨店、飲食店などが参加し、今年も5月16、17日(同時開催の「作家と職人展」は15、17日)に開催された。来場者はガイドマップを片手に、自然や街並みを楽しみながら、点在する出展場所を巡り、比良の魅力を全身で感じていた。

出展者が自ら組織し主催する 多彩な人材で作業を分担

かんじる比良は当初、出展者19人で始まった。今では、出展数は倍増の39に拡大し、来場者は5千人を超えるまでになった。

主催するのは「かんじる比良の会」。その年に出席する会員と、今回は出展できないが過去に出展した、あるいはこのイベントを支援したいという賛助会員がつける自主的な組織だ。

中心となる実行委員会は、陶芸作家や家具職人、アウトドアショップ経営者、



琵琶湖と比良山系にはさまれた自然豊かなロケーション

ドッグトレーナー、カラーセラピスト、佃煮店主、ケーキ職人など、多彩な顔ぶれの7人。代表の山川君江さんは農産品加工を担う、女性でつくる「北比良グループ」のメンバーだ。実行委員は毎年、5月の開催に向け年明けから、出展者やボランティアの受付整理、行政や地元との調整、ガイドマップやホームページの作成、広報活動などの実務に取りかかる。

基本は「みんなで汗をかく」 「無理をしないイベント」

「みんなが自ら汗をかくこと」と「無理をしないこと」を基本に続けてきまし

た。出展者のみなさんには、開催期間だけの特別な企画をしてほしいと願っています。工房の開放や体験教室、ミニコンサート、スペシャルメニューの提供など、それぞれに工夫を凝らし、楽しく盛り上げてくれています。でも、大がかりなことではなく、いつもの商品をこの日だけ特別に安くするだけでも構わない。無理をせず、できる範囲のことを楽しみながら参加する。それが、続けてこられた要因かもしれないと山川代表は話す。

無理をしないというスタンスから、イベント内容を見直すこともある。例えば、エリア内の一地区を選んで、地元の郷土史家の案内で巡る「歴史ハイキング」。当初は開催期間中に並行して実施していたが、今は単独で秋に開催している。会員が展示や店の人手を無理して、ハイキングに同行するために割くことを避けるためだ。

かんじる比良の運営資金は、大津市の補助金を受けた時期もあったが、今は会員5千円、賛助会員2千円の会費と企業からの協賛金ですべて賄う。

「お金がなければ、できる範囲で工夫する。どうしてもいいだろうと悩みながら、きつとこれからもなんとか続けていくのが、『かんじる比良』らしい」と山川代表は微笑む。



出展者と来場者が気軽に会話できるアットホームな雰囲気も魅力の一つ

住む人のつながり生まれる 自然体で飾らぬ姿勢のイベント

かんじる比良は、メディアにもたびたび取り上げられ、遠方からのリピーターも多く、比良地域の情報発信力は着実に高まっている。一方で、地域の中にも良い変化を生むきっかけになった。

「出展者同士のつながりができて家族ぐるみつきあいになった、移住してきたばかりでも地域に溶け込むことができたと、という会員も少なくない。アットホームな空気が来場者にも心地よく伝わるのではないかと。また、外から来る方に教えられて、今まで当たり前すぎて、気にも留めなかった景色が魅力だと気付



手づくり教室などを開催する出展者も多い

く。自分の住むまちに自信を持ち、日常が楽しくなる機会になりました」と山川代表。

アートを軸にしたまちおこしイベントは各地にある。外部から有名アーティストを招き、非日常性を打ち出すイベントも多い。それに対して、山川代表は「比良は思いっきりローカルにやるほうが面白い気がする」と話す。来場者は地元で生活するアーティストが公開している創作の現場にお邪魔して、工房の日常をのぞき見るような体験までできる。頑張り過ぎない、自然体のイベントが「かんじる比良」だ。その飾らない姿勢が、かえって比良の魅力を素直に伝え、来場者の共感を呼んでいるのかも知れない。



出展者も観覧できるよう、1日早く開催されている「作家と職人展」